

ウナイノチセ

女1
女2

女2の部屋／ひどく散らかっている

服や漫画が散らばる中、女2、くつろいでいる

やがて女1が入ってくる

開演

女1 あーあ、酷い。

女2 お、待ってたよー、よろしくう。

女1 見れば見るほどゲンナリするくらい酷い。

女2 いやー照れるなあ。

女1 何これ、足の踏み場も無い。

女2 そーなんだよ、酷いでしょ。

女1 酷い酷いと聞いてはいたけど、コレってさあ……

女2 えへへ。

女1 仮にも女子の部屋ではないね。

女2 仮にもってなにー。私普通に女子なんですけど。

女1 まあ女子って年齢でもないか。いい年してさ、私もあんたも。

女2 女子って言葉には女性って意味もあるんだから、いいんだよ、幾つ

になっただって女子で。

女1 いやしかし、悲惨だわ。

女2 悲惨で。言い方言い方ー！

女1 何が一番悲惨って、おばさんですらこの状態にお手上げたっただって

ことだよね。

女2 確かに！ お母さんまで。ソレ、笑える。

女1 何が悲しくて私があんたの部屋の片付けを手伝わなきゃアカンの

よってこと。

女2 まーまー、そー言わずに。友達なんだし、いいじゃん。

女1 (溜息) ま、友達・だしね。仕方ない。

女2 それも結構因縁深いよー。

女1 友達ってーか、幼馴染ってーか、もはや、姉妹・みたいな。

女2 うんうん、そんな感じそんな感じ！

女1 ま、任しときなよ、私が出来たからには、綺麗に掃除してやるから！

女2 ありがとう、頼りにしてるー

女1 なんか音楽かけよ、気分上げなきゃ、コンポ使うよ

女2 おっけー

女1、コンポを操作し音楽をかける／音楽

女3・4が辺りで踊っている

ゴミ山から文字の書いてある紙を取り出しては、ゴミ袋に

取り出された紙にはタイトルや出演者名が

やがて我に返り音楽を止め

女1 いや、違くない。

女2 え。

女1 え、ちよっと待って、なんで〇〇なの××ならともかく、え、そーい

う趣味あったの、初めて知ったー。

女2 たまにはこーゆーのも聞くんだよ。

女1 まー、人の好みはそれぞれだから、ね。

女2 ね。

女1 あーでも、想像つかない、あんたがこーゆーののせて踊ったり、歌

ったり、してんの。笑うかも。

女2 ひど。

女1 ま、いや、そーゆーのは。

女1、片付ける／女2は漫画を読む

間

女1 ……なんか、終わる気がしない。うん、しない。

女2 えー。

女1 ほんと、片付けられない女・ってやつなんだろうねえ、これは。

女2 まーね。

女1 でも待って。片付けられない、とか捨てられない女、ってさ、良い言

い方をすれば、物持ちがいいってことかな。

女2 そうそう、そうとも言うー

女1 あんたってばまさにその典型でさ。小学校の時、ランドセル、六年も

使ってみんなへにやへにやのべたんべたんになってたのに、あんたのは、

そりや新品みたいにピカピカではなかったけど、かなり上等な状態を保っ

ていた、よーうな、記憶が、ある。

女2 確かに、綺麗だった。あれはなんかのボランティアに寄付したよ。

女1 私なんか、卒業と同時にすぐ捨てちゃった。そんなくらいべこべこだ

ったのに、あんたってばさ、ほんと。

女2 物持ちが、いいんだよ。(てへ)

女1 やっぱりね。

女2 え、なに。

女1 的中じゃん、私言ったの、コレ。

女1、何かのキーホルダーを取り出して

女2 あ、わかるー、それ

女1 懐かしいね、修学旅行のさ、お土産で買ったキーホルダーよね。

女2 そうそう！ 嬉しいなあ。

女1 うわーほんと懐かしい、やばい。お揃いで買ったんだよ、確か。色違

いでせ。

女2 そうそう、緑だったはず！

女1 あんた、こんな、昔のもの、まだ持ってたんだねえ。なんか、すごい。

逆に尊敬しちゃう。

女2 まあね、それに、お揃いで買ったから、大切だったんだよ。

女1 私、早々になくしちゃったからなー

女2 え、そうなの。早々に？

女1 ほんとだめだね、物持ち悪くてさ

女2 まあまあ、凹むことじゃないよ。普通だよそれくらいが。私みたいに色々ため込んである方がよくないんだってば。きつと。

女1、キーホルダーを置き、片付けを再開する

女2 いや、もちろん、ちょっとは寂しいなって思うよ。私は大切に、お揃いだから嬉しくて、大切に持っていたのに、すぐなくしちゃった・なんて。私の嬉しいとあなたの嬉しいが、あんまり近くなかったのかわかって思っちゃったりしてさ。それは少しだけくりとした痛みで、私の心を撫でていく。

女1、突然笑い出し

女2 え、何笑ってんの、やだ

女1 ちょっと何これーねえ。

女2 ぎく。

女1 この漫画、私ずっと探してたやつだ、もう何年も前から、なんだよーあんた持ってたの、えちよつと待ってよだめじゃーん。え、だめじゃーん。

女2 え、あ、ソレは

女1 しかもこんな積読選手権日本代表みたいな顔してこう積まれてるってことはあんた絶対読んでないでしょコレ！

女2 まーね、

女1 あーあ、ひどいなあもう(漫画読み始める)

女2 いやー、私だってね、読もうと思ったよ。でもホラ周りをよく見て、散らばる私の漫画たち。

女1 (読みつつ)……しかしまあ仕方ないのかな、コレじゃ。

女2 そうそうそうなの、少年誌生まれ青年誌育ちの私には、コテコテの少女漫画はちときつかった。

女1 こうなるよね、あんたの趣味じゃ。私は好きなんだけどな、こーゆーのね。(読みながら)

女2 ……読みたかったよ、ちゃんと、あんたの好きなもの理解したかったもん、私、でもね

女1 あー！

女2 え、何！

女1 ちょっと待って、コレがこうしてあるということとは、他にも何か私のモノ、あるんじゃない、この部屋！

女2 ぎくり。

女1 ってことは……

女1、辺りを探し始め女2は着いて回りながら

女2 ねえねえ

女1 ここか

女2 聞こえてるー

女1 もしくはここか

女2 おーい

女1 どこだ

女2 えつと、えつとねえ、昔、偉い人がこう言いました、人間は忘れるイキモノだ、と。

女1 (探している)

女2 忘れるから、生きていけるんだよ。辛いこととか、悲しいこととか、あとは、借りたものこと・とか、

女1 あった！

女2 ですよー

女1 これ、むかーし買った、お気に入りのペン！ あんたなくしたって言ったのに

女2 あ、思い出した。ごめん、ほんとになくしちゃったって思ってたんだよ、ほんとごめんって。

女1 なにより、持ってたんじゃない。あーあ。

女2 いーじゃん、同じ物買って返したよ、ってまあ、そういう問題じゃないもんねごめん。

女1 ㄩ！

女2 あ、それはㄩに移したから返そうと思ってたんだよ、ほんとだよ女1 ㄩ！

女2 いやソレはまだ途中なんだってば

女1 返してもらいまーす。

女2 あーん。おさわり探偵小沢里奈(涙)

女1 充電器もね。

女2 はーい(しょぼーん)

女1、見つけた私物をカバンに詰めながら

女1 もー、色々ありすぎでしょ私の物……まだ何かあるんじゃないのー

……

女2 いやーもう、そんなに、そうそう、ねえ

女1 あー！

女2 え、ごめん、次は何

女1 卒アルじゃん！

女2 あーびっくりしたもー。そうだよ、卒アル

女1 うそー、へー、えー、なんでこんな所に。

女2 え、あっちゃ変かな

女1 普通一人暮らしする時持って来ないでしょーわざわざこんなん、ウケる。実家の物置にー

女2 えー、たまに見るの結構楽しいよ。

女1 どれどれ

女2 何だよー見るんじゃない！

女1、卒アルを広げ、暫くして突然笑い出す

女2 え、何、何がおかしいの。

女1 (ひいひい)早速、頭のクラス全集写真で、あんた、欠席者の、上の、丸い所にいるし、ウケるーやばい

女2 酷い！ そんなに笑うことないじゃん！ 風邪引いて休んじゃっ

たんだってば！

女1 つーかふつー、休むかー、卒アル写真撮影日にさー

女2 ふーん（むくれる）

女1 ほんとなんか、抜けてるっていうか、詰めが甘いついていうかねーもー。

女2 悪かったね（むす）

女1 にしても、へー、こんなに写真色々あったんだー。卒アルなんて見ないからなー。わーなつかし。文化祭でしょ、修学旅行、部活紹介もある。

女2 何だかんだ結構楽しんでるじゃん。

女1 あ、これ合唱コンクールの写真だ、わー懐かしい。

女2 そうそう、この三年のとき、合唱コンクール優勝したよね！ 嬉しかったなあ。

女1 もーさ、あなたこーゆーの好きだったよねえ。

女2 ちょっと男子ー

女1 ちょっと男子ー、ちゃんと歌ってー。とか、言って（笑う）

女2 （笑う）

女1、少し考え込んで

女1 うーん

女2 なに、どしたの？

女1 なんだっけなーこの時うちのクラスで歌ったの。

女2 覚えてないの、翼をくださいだよ。

女1 うーん。

女2 今私の願いが（歌う）

女1 あー！ そう言えばそうだ、確かえっと、

二人 今私の願いが 叶うならば 翼が欲しい この背中に鳥のように 白い翼つけてください（歌う）

女2 この大空に翼を広げ 飛んでいきたいよー……（女1が歌わないのに気付いて歌いやめる）

間

女1 ……ダメだ、やめやめ、私歌苦手なんだ。

女2 うん、知ってる

僅かな間

女1 あーお腹空いた、ご飯食べよ。

女2 え、いきなり

女1 って言ってもカップ麺だけどね。そのまいばすけつとで買ってきた。

女2 いいなー

女1 あんたの分もあるから。

女2 わーうれしい

女1 キッチン借りるわ

女2 どーぞ。

女1、立ち上がり

女1 あんたは、シーフードと醤油、どっちが好きだったっけね

女2 えー、その二択かー。私はカレー推しなんだよなー、でもその中だつ

たらー、うーん

女1 ……

女1、答えずキッチンへ向かう

女2 っておい！（つつこみ）

女1、ティファール持って入ってくる

女1 どっちにしよっかなー。

カップ麺にお湯を入れる

女2 醤油が、

女1 私、醤油にしよう

女2 （ぶーん）じゃー私シーフードにしよーっと

女1 三分ね。

女1、時間を確認し片付けに戻る

女2 （翼をください歌ったり）

女2 ……なんか、三分って長い。

女2 待ってる時の三分って長い。なんてことない三分は、何てことなく流れていくのに、待っている時の三分って、とても長い。

女2 手持無沙汰の感覚だけがあった。私はこれからずっと、この感覚を持ち続けていくことになるのだろうか、そんなことを考えたりしていた。

三分経ったら

二人（口々に）いただきます

二人、徐にカップ麺を食べ始める

女1 あー、おいしー。

女2 ね、美味しいね。

女1 こんなに美味しいんだもん、……絶対体に良くないよなあ。

女2 何いきなり。

女1 だってラーメンなんて脂質塩分糖質のトリプルコンボでしょ、絶対よくないじゃん。

女2 言われてみればね（うへー感）

女1 でも、体に悪いものほど美味しいって聞いたことある。あれホントなのかな。

女2 あー、聞いたことあるかもだよ。はは、なんか、納得だね。体に悪いものほど美味しい・かあ。

女1 良薬口に苦し、の反語と考えれば結構なりたつ。

女2 なるほど。（見る）

女1 体に悪いものほど美味しい・ね。わかる、理屈はわかる。でも美味しいからやめられない。美味しいからこそやめられない。（歌う）わかったやいるけどやめられね、アホレスイスイーダララッタスラスラスイ ……

女1、歌うのをやめ無言で何かを見つめている

女2 ん

女1 ……

女2 どしたの、いきなり、黙っちゃって

女1 ……コレ。見覚えある、私。

女2 それは、

女1 これ、あなた、元カレとペアだって言った、指輪。

女2 ……うん。

女1 え、何であるの。

女2 ……

女1 おかしいじゃん、何であるん、アイツと別れさせた時、捨てたって言
ってたじゃん。

女2 ……うん。

女1 何であるのコレ、こんなところに、ねえ、おかしいじゃん、あなたさ、

女2 ……

女1 ……何、あの男のこと、もしかして、好きだったの、まだ

女2 ……うん。

女1 ねえちよっと馬鹿じゃないの、あんなだけ、あんな、浮気されて、殴ら
れてさ、私らみんなで何とかしようって、寄ってたかって必死で説得して
さ、あんなのと付き合ってたって絶対幸せになれないよって。それで別れ
させて、あんなだって納得して、あんなダメ男もう好きじゃないよって、え
でもまだ好きだとか何の冗談。よしてよ。これ、ほんともう、馬鹿もホリデ
ーホリデー……

女2 ……ね。

女1 ……なんつって……はは。ばかみたい。

女2 ごめん。

女1 ばかみたい、私。

女2 え。

女1 それがあんたの幸せなんだって思って、私、だけど、違ったのかな、
それ。私の勘違いだったのかな、それ。

女2 そんなこと、ないよ。

女1、再び食べ始める／女2は見ている

女2 ……私、私ね、ちゃんとわかってたよ、みんなが、私のことを思って
色々言ってくれたんだって。感謝もしてる。私一人じゃきつと、無理だった
から。そのこともわかってた。痛いほど……。でもさ、難しいね、こーゆーの
って。わかればわかるほど、難しくてさ。わかるのと納得するのって、違う
からね、理解すればするほど、納得と離れていくの、皮肉だね。

女2 でも本当は、心のどこかで、一番奥の所で。私。

女1、やがて食べ終わり、二人分のカップ麺を片付ける

女2、その姿を見ている

女1、キッチンから戻ってきて煙草をテーブルに投げる

女2 あ。

女1 何これ。ねえ、何これ。

女2 ……

女1 コレ、煙草じゃん。なんでこんなんがあるの、あんなうちに。

女2 ……

女1 ……

女2 あのさ、

女1 ねえあなた、煙草やめたつってたよね、あんなだけさ、私やアカリや
サエがさ、体に良くないからやめろって、あんなだけ、口酸っぱくして、何度
も、何度も……

女2 ごめん。

女1 嘘だったんだ。……全部嘘だったんだね。煙草やめたよって言った
のも、ペンをくちやったつって同じの買ってきたのも、——ああそっか、大
丈夫なのって聞いたら大丈夫ーなんつってへらへら笑ってたのも、嘘・だ
ったのかな、全部……

女2 ……

間

女1 限度ってもんが、あるでしょーよ、限度。

女1 物持がいいってつって、そんな、自分で片付けられないほどのも
の、抱え込んで、自分で処理しきれないほどの感情、抱え込んで、辛いこと
とか、悲しいこととか、全部さ、限度がさ……

僅かな間

女1 私は、私はね、あんなのこと、友達以上に、幼馴染以上に、ホントの姉
妹みたいに、思ってた。

女2 私だって。

女1 それはさ、例えば私があんたの姉貴分で四六時中面倒見てた、とか、
迷惑かけられた、とかそういうことじゃなくてさ。

女2 うん、わかるよ。

女1 時にあなたはあたしの妹で、時にあなたは私の姉だった。

女2 そうだね。

女1 まあ、あなたが妹比重の方が多かった気がするけど。

女2 うん。

女1 でもさ、私結局あんなのこと、本当の所は全然知らなかったんだね。
わかってるつもりだったけど、つもりだけ。理解してるつもりだったけど、
つもりだけ。〇〇聞くとか、カップ麺何味が好きかとか、煙草まだ吸って
んのとかが、あんな男のこと、まだもしかしたら未練あったのかも、とか、全
部全部。つもりだけ。

女2 そんなことないよ。

女1 なんか、ソッってすごい、馬鹿みたいだよ。私、なに、一人相撲、み
たいな。あ、やば、笑える。

女2 そんなことないよ

女1、俯いたまま小さく笑っているがやがてそのまま押し黙る

女2 ねえ、そんなことないから、だからさ、泣かないでよ。

音楽

女1、やがて顔を上げ、煙草を吸おうとしてみる

ライターが上手く使えず、火はつかない

やがて小さく笑い出し

女1 あー！ 無理だ、無理無理無理！ 難しいよ、指痛いし！ 私には、
こんなライター、上手く使えない、シュツって、指こすれて痛いだけ。煙草だ

って、煙たくて、臭いだけ。体にだって悪いんだし、煙草なんて、百害あって

女1 じゃあ、また。

一利なし。私には、煙草なんて吸えないよ。……でも、そーだよ、体に悪い

女2 うん。

ものほど、美味しいんだよね、そーだよ。私だって、カップ麺、美味しいから

女1、ゆっくりと外へ出ていく

さ、やめらんないよ。あんたが最期まで煙草、やめらんなかったみたいにな

女2、その姿をだまって見送っている

女1 何も。何もあんたのこと理解できてなかったかも、な、私だけど、そ

やがて徐に歌いだす

こくらいは、理解してたい、と、今、思えた。

女2 (小さな声で歌う)

女2 ……ありがとう。

女2の歌に徐々に音楽が重なってくる

女1 聞いてんの、聞いてんなら、返事してよ、ねえ……

幕

女2 ……

女1 ばかみたい。

間

間／小さく笑い

女1 あのさ、この部屋さ、今月までの契約なんだった。月末には退去しなきゃなんないの。

女2 そうなんだ。

女1 あんたのいた、あんたの生きてた、形跡、軌跡・は、どんどん消えてく、消されてく、流されていく。

女2 そんなもんだよ。

女1 ……おばさんもさ、酷いよ。

女2 え。

女1 まだ、辛いんだって、ここに来るの。まるであんたがまだ生きてるように感じてしまうんだって。だから私にちょっとでも整理してって、生活感なくなる程度にって。

女2 ……。

女1 そんなんさ、私だって、同じに決まってるのにさ。

女2 ごめん。

女1 どんな気持ちでいたの。捨てられないたくさんの荷物と、捨てられないたくさんの想いに囲まれて、あんた、一人で、どんな。

間

女1 今日はさ、帰るわ。

女2 ん、そか。

女1 また来るよ、近いうちに。だってこの惨状、月末までに何とかしなきゃヤバすぎるしね。

女2 (笑う)

女1 確かにあんたの生きてた痕跡は、物質的にはどうしたって消えていくけど、その一つ一つを、私の記憶に、刻みに、来るよ。

女2 ……うん。

女1 ねえ。

女2 なに。

女1 コレ、貰ってもいいかな。修学旅行の。

女2 うん、いいよ。

女1 今度はさ、なくさない。大切にするよ、あんたみたいに。

女2 うん。

楽屋　く或いはとどまり続けることしか出来ない者たちへの詩く

女3
女4

女3、4が腰かけ、メイクをしている

音楽が流れている（一話のラス曲）

やがて、開演

女3　あ、MO。

女4　え、ほんと。

女3　うん、この曲ね。もう覚えた。

女4　いいね、

女3　いいよね、この高揚感。なんか、始まるぞって感じでね。

女4　ゾクゾクしちゃう。

女3　ワクワクする

女4　ドキドキする

女3　あ。私最近ハラハラするようになった。

女4　え、ハラハラ。なんでまた。

女3　うーん、なんだろ、親心。

女4　親心！　ねえく

女3　何その目

女4　いや、別に。ま、わかんなくはないけどく

女3　でしょ。だって、たくさん知ってるわけ。この年にもなれば。

女4　何を？

女3　本番でのトラブル。劇場来てテンション上がっちゃって、台詞飛んだり怪我したり。音響照明のミスとかもあるし、いきなりケータイ鳴り出したり、みたいなイレギュラーまで。

女4　あるある

女3　殺陣なんかあれば心配倍増、そもそも普段の稽古場で劇場と同じ広さ使えるのもなかなかないわけだし。

女4　それ！　いざ劇場入ってみたら、すごい全然広さ違う、みたいなね。

女3　そう、だからハラハラ。

女4　優しいのねえ

女3　優しいってのとは違うと思うけど。なんか、ホラ、自分も通ってきた道だから、わかるものがあるよね。

女4　ひゅく（音）

女3　何今の。

女4　風がふいた。

女3　なんの。

女4　先輩風。

女3　（じろー）……

女4　ごめんって。

二人、メイクに戻る／適宜の間

女4　本番のトラブルと言えば、この前さあ

女3　んー。

女4　本番中に、舞台上の役者の声にお客さんのケータイが反応しちゃってさあ。

女3　反応。着メロとかバイブとかじゃなくて。

女4　そ、反応。応答・て感じかな。ともかく、最近はそのような機能があるのね、で、役者の台詞に反応しちゃって。

女3　うわー、そんなことあるんだ。

女4　笑いごとじゃないけどなんか笑えた。

女3　え、ひどー。

女4　いやいや、笑っちゃうよね、アレね。

女3　なんて反応したの。

女4　ポポン。すみません、聞き取れませんでした（マネて）

女3　（笑う）やだー。

女4　ね、笑うでしょ。

女3　え、酷いねーそれ。

女4　なんか大変だよねー。前は着信音だけ注意しとけばよかったけど、最近はそのなんも気にしなきゃいけない。

女3　技術の進歩で却って不便になる、みたいなそーゆーこと、やっぱあるのね。

女4　一応、反応するワードみたいなの、あるらしいんだけどね。

女3　なんて？

女4　へい、シリ。

女3　シリ？

女4　シリって名前なんだって、その、応答するソフト、みたいなやつ。

女3　へー、へいって、呼びかけてるわけね。

女4　へい、シリ！（大きく）

女3　うわ、びっくりした！　どうしたのいきなり。

女4　いや、なんか、反応しないかなーって。客席から返事が

女3　何それ！　やめなよ、なんでそんなこと

女4　面白くない。

女3　性格わるっ、やめなって

女4　へいシリ！！

女3　なんでそーゆーことするかなー、だから私達、毛嫌いされるのに。

女4　は。毛嫌い。なにそれ。むかつく。もっと邪魔してやろ

女3　ちょっと、

女4　オッケーグーグル！

女3　シリじゃない！

女4　グーグルバージョンのやつもあるの！　オッケーグーグル！

女3　しかもどこいくの！

女4　いや、袖のところでやった方が客席までよく聞こえるかなーって。

女3　だーかーらー

女4　あーはいごめんて。

女4、席に戻る

女4 (ぶー)

女3 もう、なにぶすくれてんの。

女4 べつにー。

女3 あのねえ、私達が邪魔してどうすんのって話じゃない。私達は、優しくあたたかく、見守り、励まし、送り出す側の立場なんだよ。

女4 ねー。もーなー。わかってるんだけどなー。

女3 ほんとにわかっているの。

女4 ……うん

女3 まあ、気持ちはわかるよ。わかっている、理解している、けど、それは納得しているのとは、違う。

女4 ……うん

女3 ……(溜息)

間

女3 よく、夢を、見たの。

女4 ……夢。

女3 そう。夢。

女4 なんの。

女3 舞台の上にいるの、私。本番が始まっているの。目の前にはお客さんがいて、舞台上には共演者が並んでる。辺りはとても静か。それでね、台詞を言おうとして口を開くんだけど、台詞が、全く、出てこない、っていうか、台本何も覚えていない。目の前にはお客さん、幕は開いてる、シヨウマストロコオン、どうしよう、どうしよう、どうしよう……そんな、夢。

女4 うわ、考えただけでちびるねそんなシチュエーション。

女3 こーゆー夢を見るのは、まーいわゆる役者あるあるの一つなんだけれども。

女4 そーね、私もたまに見たなー。

女3 他には、本番当日、衣装がない！ 探さなきゃ、開演時間はどんどん近付く、衣装はどこだ、見つからない！…

女4 ひえー

女3 稽古初日、台本貰いました、さあ読もうとした時、はい本番始まります、

女4 ぎゃー(死ぬ)

女3 (笑う)

女4 怖すぎる、それ、ちびるー。あ、それに

女3 なになに

女4 私さ、演出なんかもちよっとやってたのね、そしたらさ、その役者あるあるの演出バージョン、みたいなやつ見たよ

女3 へー、どんな感じなの。

女4 死ぬの。

女3 ……へ、何それ。

女4 いや、だから、死ぬの。

女3 あなたが。

女4 違うよ。役者が、目の前で、死ぬの。私が演出してる役者が、目の前で

自殺するの、当てつけみたいに、復讐みたいに、アイキャンフライ。

女3 うわー

女4 いや、あれはきたね。流石にね。

女3 それは、台詞覚えてないのとか衣装がないのとかとはまた違った怖さ。

女4 ちびるよ。

女3 ちびりすぎだから、さっきから。

女4 まあ確かにちびりはしなかったけど、飛び起きた。ものすごい汗かいててさ。あーあの時の恐怖は今でも鮮明に(頭抱え)

女3 他人事と言え笑える。

女4 まあ、いいふうに捉えれば、そんな夢を見ちゃうくらい芝居のことを考えてたってことで！

女3 お、いいね、前向き。うん、そうだね、確かに、寝ても覚めても演劇の

ことを考えてたもんなあ。

女4 その夢さ、今も見るの。

女3 え。

女4 いやだから、今でも、見るの、その芝居の夢。

女3 今は……なんてゆーか、いつもいつでも、夢・みたいな。どっか、そんな感じ、ある。

間

女4 ごめん、うん、そうだよね、なんか、ごめん、変なこと・聞いて。なんか自分でも、忘れてたっていうか、思わず。

女3 別に、いいよ

僅かな間

女4 なんか、ほんとごめん、怒ってる？

女3 いや怒ってないし、そもそも怒るとかないし、っていうか例えば今私が怒ってるって言ったとしても、それは多分、怒ってるって思ってるだけのことであって、今はもう、そういうの、ないし、さ……

女4 ……うん、あの……いや、その、

女3 ……

女3、気まずさを誤魔化すように席を立ち、舞台の方へやがてはたと何かに気付き

女3 あ。(濁点つき)

女4 ……

女3 ねえ、ねえねえねえねえ。

女4 ん、何。

女3 あの子達、確かこの後のシーンでさ、お湯使ったはずだよ。

女4 んあー、そうね、カップラーメン作るんだよ。確か、二人分。

女3 お湯がさ、ティファール、て言うんだっけ、あの便利なやかんみたいなやつ。

女4 そうそうティファール、便利だよ。

女3 で、確かお湯は、開演前に沸かしといて、すぐ使えるようにしてたよ

ね。

女4 そうだ、ちょっとゆるくなっちゃうんだけどねーとか笑ってた。てゆかよく覚えてるね。すごいな。

女3 それよりも、多分アレ、お湯沸いてない。開演前にスイッチ押したの見てないもん。

女4 お、となると、プリセットミスかー。やっちゃったね。

女3 (見て) ほらーやっぱり! 水しか入ってない。

女4 あーあ。

女3 沸かしといてあげなきゃ。

女4 え!

女3 だって、可愛そうでしょ。

女4 いやでもさあ……

女3、既に押している／それを見つつ間

女4 (溜息) あーあー。

女3 だめかな。

女4 いや、そんなことないけど、ホラ、あんま度々だとき。ね。何ていうか

女3 うーん、でも、

女4 それに、あんまり甘やかしすぎる必要ないんじゃないの。本人の役者としてのね、そういうスキルアップとかのためにもさ、こう、先輩として、厳しくする必要がね、

女3 ひゅ(音)

女4 え、何。

女3 いゝ先輩風がふいていきましたよ、今。

女4 ……もーねー(笑う)

女3 仕返し。

二人、笑っている

そこへ唐突に女1が駆け込んでくる

女1 やばいやばい、

女達 ……(しらんぷり)

女1 私多分、お湯沸かしとくの忘れた。どーしよ

お湯、ちょうど沸きたてか沸きあがるくらい

女1 え。

女達 (しーん)

女1 あれ、あれ。沸いてる。(キョロキョロ)

女1 舞監さんかな、ま、いいや、よかった、助かった。ありがとう、ごさいまーす。

女1、ティファールを持って舞台上へ

女3 (ホッ) よかったー。

女4 優しいゝ

女3 そんなこと、

女4 さっきだってさ、あの子(女2を指し) MOと同時に暗転板付き、立ち位置間違えてたの、後ろからポンって

女3 だって! ど頭でミスるとか一大事だからね、そんなんだったら目

も当てられない!

女4 ま、そうんだけどねえ。

女3 じゃーいいじゃん、

女4 後はさ、余りに袖に居すぎて、ハケ動線のジヤマしちゃって、ぶつかったりして、問題になるとかもね。

女3 だって、出来るだけ近くで見たいじゃない。後輩たちの雄姿をね。

女4 気持ち、わかんんでもない。

女3 ね、じゃーいいじゃん!

女4 でもね私は、私はよ、自主性を育むのも大事なことだと思うわけ、見守るという方法でね。っていうかよく考えてもみてよ。そもそも暗転板付きなんて、ご丁寧に蓄光テープで場所教えてくれるんだから、間違えう方が(問題あると思うんだけどなあ)

陽気な音楽

女4 わ。

女3 お!

女1・2、音楽に合わせて踊り出す

女4 ねえねえ、ダンスシーン始まった!

女3 いいないいな、何度見ても楽しそうだねこのシーン、ねえ。

女4 うん、楽しそう。これで歌ったらまるでミュージカルだね、ミュージカル。

女3 私も踊りたくなってきた。

女4 え、踊れたの。

女3 いやー、そんなに上手じゃないけどさ、いいじゃん、誰に見せるでもなし。

女4 ま、そっか、確かにね(笑う)

女3 ではではっ!

女3・4、踊りに加わる

それは次第に音楽にのせて台詞を言い合う大会になっていく
シェイクスピア等、古今東西の名台詞

女3 『明日、また明日、また明日と、時は小さき足取りで一日一日を歩み、ついには歴史の最後の一瞬にたどりつく、』

女4 お、いいねえ、シェイクスピア! 『昨日という日はすべておろかな人間が塵と化す死への道を照らしてきた。』

女3 『消えろ、消えろ、つかの間の燈火! 人生は歩き回る影法師、あわれな役者だ、』

女4 『舞台の上でおおげさにみえをきいても出場が終われば消えてしまふ。白痴のしゃべる物語だ、』

女3 『わめき立てる響きと怒りはすさまじいが、意味はなに一つありはない。』イエー! ▶

女4 『我、孤立を恐れず、孤高に陥らず、その孤独を友とせん。警視総監殿いま義理と人情は、女がやっております。イエー!』▶

女3 『恋の測り難さにくらべれば、死の測りがたさなど、なにほどのことでもあるまいに。恋だけを、人は一途に想っておればよいものを。』

女4 『あたしはたうとうお前の口に口づけしたよ！ お前の唇は苦い味がする、血の味なのかい、これは……』

女3 『いいえ、さうではなくて、たぶんそれは恋の味なのだよ。恋は苦い味がするとか……でも、それがどうしたのだい？ どうしたといふのだい？』

女4 『あたしはたうとうお前の口に口づけしたよ、お前の口に口づけしたのだよ。』

女3 『殺せ、あの女を！』▶

女4 『なぜ笑うのです？ こんなときに不謹慎です』

女3 『なぜかだと？ 流す涙はもう一滴も残ってはいないからだ。』▶

女4 『私たちは嘘を信じるように導かれる 自らの目を通して見えないときに 夜、そこで滅びるために生まれたものを魂が眠り光の線が見えないときに 神は現れる そして神は光だ 夜に住むこれらの哀れな魂たちには、しかし人間の形態が誇示される この昼間の世界に住む者には一粒の砂にも世界を 一輪の野の花にも天国を見、君の掌に無限を一瞬の内に永遠を捉える』イエイ！▶

女3 『でも、あなたは、あなたは私を知りません！』（小声で）

女4 え、

女3 『でも、あなたは、あなたは、私を知りません！』！

音楽、止まる／女1・2も同時に止まる

間

女4 ……『忘れません。』▶

間

女達、各々持ち場へ戻る／どこか気だるげに

女3・4は再びメイクへ戻る／静寂が過ぎていく

女4 ……楽屋っぼいね。

女3 ……は？

女4 だからさ、今の私達、楽屋っぼくない。

女3 何言ってるの、言われずともココ、楽屋だしね。

女4 いや違くて。あのホラ、清水邦夫の。

女3 ああ、えーと、流れ去るものはやがて懐かしき、だっけ。

女4 そうそう、女優の幽霊が出てくるあの有名な。

女3 あーはいはい、知ってる。でもえ、それが。

女4 うん、こうやって、鏡に向かってメイクしている場面から始まるの。そうして台詞の練習をしながら、永遠に來ない出番を待ち続ける。やったことないんだ。

女3 ないない！ 貧乏小劇団は、上演料払うのだって難しいんだよ。大きい劇場でできないから、じゃあ小さい所でステージ数増やして、とかだと、今度は上演料もステージ数分取られるし。かと言って、無許可でこっそりやるのは、違つと思つし、やりたくない。だから結局、新作、新作。ちぎっては投げちぎっては投げ。

女4 なんかなー、へんなとここで律儀つつーか、真面目なんだよなー、普段アウトローぶってアングラ気取ってるくせにさー。

女3 みんな、似たり寄ったりでしょ、そこら辺はさ。

女4 そーいえば、この前知ってびっくりしたんだけどさ、つかこうへいも最近は上演料取るんだってね。

女3 え、そうなの！ ただじゃなかったっけ、つかさんの本は。

女4 いや、なんか、亡くなってからしばらくして、取るようになったとか聞いたけど。まあ、聞いただけ、だけど。

女3 あー……そうなんだ……そうなのね……

間

女3 時代は、変わるなー、どんどんどんどん変わって行って、そうして私を置いていく。

女4 え、今更。

女3 うん、今更、だけど、改めて。例えばさっきの携帯の話もそうだし、つかさんも、そうだよ、蟻川さんも。

女4 いやそれはしょうがないって。リアル楽屋だし、私達。

女3 リアル……

女4 わかるでしょって、置いて行かれるもの。

女3 ……ああ、そうだねえ。私達、もうあそこには行かない……

女4 うん。そだね。

女3 ……そう考えると、なんか、ああ、だめだ。私、考えないようにしてたのに。

女4 大丈夫。

女3 なんか、とても、惨めだ、私。

女4 そんなこと（ないよ）

女3 あるよ。とても惨め。だって、だってよ、あそこには上がれなくなるくらいなら死んだ方がマシだって、いつかは考えていたこともある私が……

あーあ、なんて皮肉。

女4 皮肉。

女3 皮肉だよ、あそこには上がれないし、更には死んでもいる、なんて。何の冗談よ、面白くもない。

女4 ……

女3 だったらもういつそのこと、完全に消えてしまいたかったよ。舞台も、台詞も、この思いも、何もわからないように、覚えていないように……誰からも忘れられて、私自身も私を忘れて、そして、忘れられるという恐怖さえも忘れて……私の存在が全て、暗い宇宙に広がるエーテルの海に溶けてしまつて、たくさん魂と一つになってしまつてさ、もう、こんなところにいなくてもいいように、一番近くに、こんなに恋い焦がれながら決して届かないもの一番近くに、いなくてもいいように……

女4 しょうがないよ。

女3 ……何が。

女4 それでもさ、例えば本当にそう思っていたとしても、それでもここに来てしまつのが、きつと、私達・なんだと思つたよ。……確かにそうだけどさ、みんな、私達を置いて流れていくし、私達は忘れられながらそれとどどまり続けるしかないけどさ。全て忘れてしまえたら、どんなにか楽

かと思っけど、それでも。

女3 ……なに、急にものわかりよくなって。さっきまで、ヘイシリ、とかオツケーグーグル、とか言って妨害しようとした人に思えないんだけど
女4 まーまー。
女3 ……

女4 ままならぬのが、この世界だよ。私だって、どんなにそう思ったかわからない。
女3 ……うん、わかってる。ありがとう。

沈黙／やがてゆっくりと音楽

女4 あ。

僅かな間

女3 ……ラス曲だ。

女4 終わったね。

女3 ねえ聞こえる、拍手。

女4 うん、聞こえるよ。拍手。

女3 ねえ、見える。笑顔。

女4 うん、見えるよ、笑顔。

女3 あー！

女4 なにいきなり

女3 なんか、ようやく、緊張がとけた！

女4 えーもしかして始まってから今までずっと緊張してたの、待ってよそれちよっと笑う。

女3 ね、自分でもおかしい。私ずっとハラハラしてたんだよ。別に、自分が出てるわけじゃないのにさ。

二人、微笑んでいる

女3 いーや。

女4 え。

女3 なんか、いーや。いや、良くはない、さっきみたいな思いは多分、消えずにずっと続いていく。

女4 うん。そうだね。

女3 それでもね、こうして、私がここにいて、あの子たちの背中を少しだけでも押してあげられて、それで、お客さんとあの子たちの笑顔が見られるならさ。私、いいかな。

女4 ひゅ〜（先輩風がふいていく）

二人、笑っている

やがて女4、役者の荷物を漁り出す

女3 え、ちよっと何、どしたのいきなり。

女4 いいからいいから。

女3 よくないでしょ、何してるの。

女4 じゃじゃーん。

女4、水のペットボトルを二本持っている

一本を女3に差し出すと

女4 ね。乾杯しよ。

女3 え？

女4 乾杯しようって。楽屋・みたいにブランドじゃなくて悪いんだけど。夜は長い。私達の、明けない夜は。

女3 コレ水、だよ。え、誰の。

女4 そこにあった。役者さん達の。

女3 え、いやいや。だめでしょ。

女4 いいっしょ。大丈夫だよ、気にしない気にしない。はい。

女3 水ね。

女4 そ、水。

女3 （水を見ている）

女4 まあ、私達にはこれが一番お似合いだよ、これが。だってほら、ウーロン茶は喉の脂を取っちゃうし、甘いやつは逆に喉が渴くし、炭酸水はゲップが出るし、お酒なんて当然、以ての外だし。ね。

女3 （笑う）……確かに、ほんとそうだ。（一頻り笑い）じゃあ。

女4 じゃ、乾杯。

女3 何に。

女4 何だっていいじゃん。必要あるソレ。

女3 まあ。

女4 じゃあ、このクソみたいな演劇・ってやつに。

女3 いいねソレ。（笑う）クソみただけ私達を捕らえて離さない、この演劇・ってやつに。

二人 かんぱーい

明るい音楽

二人、水を飲み笑い合う／女3、ややあつて

女3 流れていく。すべてが流れていく。私たちのもう二度と立つことのできない世界で、舞台の上で、流れていく。ああ、愛しいなあ、遠いなあ。…眩しくて、それは余りに眩しくて、その甘やかな輝かしさはまるで私の瞳を刺すようで。——痛みさえ覚えるその羨望は、全く等価値なほど危うい幻の、私の心・という幻の、その奥底の柔らかい、優しい色に触れながら錦の光を振り撒いて、そうしてやがて、ゆっくりと消えていった。

二人は、舞台を見つめている

幕